

価値の多元性と動機をめぐるトリレンマ

塩野 直之 (Shiono, Naoyuki)

東邦大学理学部

本発表は、実践理性や行為の領域に属する問題を取り上げる。

私は以前、ゲイリー・ワトソンに倣って、行為をもたらす心的状態のうち、いわゆる賛成的態度と呼ばれるもののなかに、価値評価と動機を区別した。価値評価とは、行為者がどのようなものごとに価値を見出すかに関わり、実践的推論の構成要素となるものである。他方、動機とは、その行為者の実際の行為を引き起こす力である。この区別によって、意志の弱さの説明が可能となることを私はかつて論じた。

さらに最近、私はジョゼフ・ラズに倣って、上で言うところの価値とは多元的なものであり、異なる種類の価値は相互に比較不可能であることを論じた。これによって、行為者が人生の岐路において直面するような深刻な意思決定はなぜ困難なのかを説明することができる。

ところがこれらの主張を行うと、ここに一つのトリレンマが生じるように思われる。この問題は、私の知るかぎりこれまであまり論じられたことがなく、本発表ではそれを主題として提示したい。

トリレンマの第一の構成要素は、動機の強さは相互に比較可能だというテーゼである。第二は、上で見た、異なる種類の価値は相互に比較不可能だというテーゼである。第三は、通常、動機の強さは価値評価の高さに応じたものになるというテーゼである。ここで、第一のテーゼと第三のテーゼを組み合わせると、価値の相互比較は可能であることが導かれ、第二のテーゼが否定されるように思われる。つまり、これら三つのテーゼを同時に擁護することはできないように思われる。

この問題に、私は以下のような方針で取り組みたい。まず、第一のテーゼは、動機概念の機能的定義と言ってよいものであり、これを否定することは困難である。

第二のテーゼに関しては、トリレンマの問題をいったん措くとしても、種類の異なる価値は一般的に相互に比較不可能だという主張は、そのままでは強すぎるように思われる。われわれは、全く異なる諸価値のあいだで容易に比較や選択を行いうる場合もあるからである。したがってこのテーゼは、比較が困難な場合があるとか、比較が容易であれ困難であれ、その比較の判断には正当化根拠がないといったテーゼとして再定式化される必要がある。

第三のテーゼは、価値評価を行為と関連づける役割を担っているため、やはり全面的に

否定することは難しい。しかし、価値の多元性を認めることは、価値と動機の関わり方にも多元性を認めることを伴うはずであり、第三のテーゼはそのことを許容する仕方で再定式化されるべきである。たとえば、トマス・ネーゲルが「個人的な計画やプロジェクトへのコミットメント」と呼んだものは、仕事であれ趣味であれ人間関係であれ、われわれ各個人が多大な時間や熱意を費やして追求するものごとのことであるが、これに関しては、各個人が当のものごとへの動機を持っていること自体が、それに価値があると判断する理由となる。他方、倫理的な義務の場合には、逆に、その義務の遂行が価値を持つことから、その遂行への動機を持つことが規範的に要請されるものと思われる。このように、第三のテーゼは、動機の強さは一般に価値評価の高さに応じたものになるという主張と解されるべきではなく、多元的な各種の価値のあり方に即して再考される必要がある。

以上に概略を述べたとおり、私は本発表で、価値の多元性と動機をめぐる一つのトリレンマを提示し、それを構成する第二と第三のテーゼの再検討を通じて、その軽減ないし解消を図りたい。